

総合制高等学校における学力向上のための実践研究

― 校内実力テストの試みを追跡して ―

新潟県立新潟江南高等学校 和 泉 修 治

I はじめに

所謂総合制高等学校は単一課程のみを置く単独制の高校に対して、普通課程や職業課程などの複数の課程を総合化した形態の高校であり生徒の多様な要求に応じたものとして、その存在価値が見直される必要がある。一方それぞれの課程の特色を生かした教育活動が期待される中で、同一施設内に生徒全員を収容する必然性から、学力向上に関して、それなりに困難な課題を有している。

この研究は、普通科、商業科、衛生看護科を置く総合制高校である新潟県立新潟江南高等学校が、生徒全員を対象として、学力向上の一助となることを期待して試みた実践研究の記録である。

II 当校の沿革の概要

新潟県立新潟江南高等学校は、新潟市を東西に二分する日本一の長江信濃川の南東部に位置し、白鳥の飛来する鳥屋野潟を直近に望む静かな環境の中にある、男女共学の総合制高校として、約1200名の生徒を収容している。

創立は昭和37年で、しかも当初は県立新潟女子高等学校として発足し、1学年普通科4学級、商業科2学級の6学級であった。その後、昭和40年に公立では県下で唯一の衛生看護科1学級を設置すると同時に、商業科2学級を増設し、更に昭和49年より現在の校名に改称し、男女共学となり、現在1学年普通科6学級、商業科2学級、衛生看護科1学級、全校で27学級を有する総合制高等学校として、創立以来19年目を迎えようとしている。

Ⅲ 課題の確認とその過程

当校は昭和49年より男女共学となり、校名も改称されたが、女子高校としての伝統と特色に加えて、男子生徒の入学が契機となって、生徒の多様性は一層増幅されることとなり、特に学力向上に対して、生徒の多様性が論じられ、それへの対応が求められることになったのである。そこで過去の記録をもとに次第に問題化してきた課題とそれへの対応の過程を辿りながら、主に審議の中心となった学習指導委員会の動きを追ってみる。

1) 学習指導委員会による昭和51年度末のまとめの中で次の記述がみられる。

○実力テストを定期的実施することについて：

各学年の学習到達度をほぼ客観的に知ることが出来るような「標準テスト」的なものがあったら実施してみたい。その回数は年間を通して1回～2回程度とする。

2) 昭和52年度に入り、学習指導委員会ではプロジェクトチームを編成し、具体的な研究に当る委員を2名選出した。

このプロジェクトチームの研究をもとに、学習指導委員会では、次年度実施へ向けて検討を重ねたが、中間過程での報告の一部は次の如くである。

「実力テスト」について（英・数・国）

- a) 提案理由としては
- ア) 学習意欲をふるいたさせる。
 - イ) 現行の実力テストは希望者のみによるもので、全校一斉ではない。従って実力テストの経験なしで卒業してゆく生徒も多い。
 - ウ) 学校体制に組み入れることによって、学習意欲振興の一助としたい。
- b) 内容としては
- ア) 年1回、5月上旬に実施。
 - イ) 問題の作成は、普・商・看の各学科毎に行なう。
 - ウ) 採点・処理・評価は当該教科にまかせるが、要請があれば協力体制を組む。
 - エ) 出題範囲は、前の学年での学習の内容とする。
- c) 問題点としては
- ア) 英・数・国に限らず、理・社或いは希望する教科も加える。
 - イ) 宿題テストとの関係もあり、範囲をもう少し明確にする。
 - ウ) 出題方法は標準テストとする。

この報告をうけて、職員会議で指摘された問題点は次のようなものである。

1. テスト後の生徒への返却はどのようにするのか（事後処理）
2. テスト処理及び結果の取り扱いはどのようにするのか（事後処理）
3. 学級主任の役割はどう考えたらよいか（事前・事後の指導）
4. 年間に2回（5月と11月）行ったらどうか（回数と時期）

3) 実力テストの大綱決定

職員会議で指摘をうけた問題点を更に審議し、検討を加え、学習指導委員会では年度末の総括の中で次のように大綱をまとめた。（S. 53. 1. 14）

「実力テスト実施の大綱」 （従来の宿題テストとは関係なく実施する）

- (1) 実施教科 英語、国語、数学、理科、社会 の5教科
- (2) 実施案

教 科	4月下旬	9月～10月
英 語	2年 3年	1年
国 語	2年 3年	1年
数 学	2年	1年
理科・社会	な し	2年 3年

- 留意点
- ア. 理科・社会は合わせて10科目中より1科目を選択する。ただし、2年は1年次で履習したもの及び履習中のものより選択する。
 - イ. 実施に当っては、授業日をこれにあて、学年毎または全学年一斉に行う。
 - ウ. 試験の内容は総復習を主眼とした実力テストであり、問題は各学科毎に作成する。

(3) 問題の作成及び処理

- ア. 問題作成及び採点、成績伝票は関係教科で行ない、学級主任へ渡す。
- イ. 学級主任はクラス毎の一覧表（得点・合計点・平均点・クラス内順位）を作成し、教務部へ移管する。

(4) 結果の処理

- ア. 各学科毎に全体の順位をつけ、上位者のみ氏名を発表する。
- イ. 生徒の進路指導の参考にする。
- ウ. 成績カード（または成績用紙）を作成し、結果を記入の上、通知表に添付して家庭へ連絡する。

(5) その他

名称は模試との関係で「実力テスト」とはっきり銘うつべきである。又、校内模試に関しては将来は発展解消する方向をとりたい。

学習指導委員会より提案された実力テストの大綱案は、職員会議で了承され、次年度より実施することに決定した。

ところで、これを実施するに当って主管する分掌をどこにするのかについて、従来校務分掌組織の中に位置づけられていなかった関係から、関連する教務部に入れられ、更に学習係の仕事として位置づけることとなった。

IV 昭和53年度 第1回 実力テスト 実施計画(案)

前年度の学習指導委員会の答申にもとづいて、実力テストの実施の大綱が決定され、教務部学習係の仕事として実際の計画案作成がなされたが、次に示すような実施計画となった。

1. ねらい 学習意欲の高揚と学力向上への一助とする。
2. 実施期日 昭和53年4月25日(火)
3. 実施時限 第2学年 第1限～第3限
第3学年 第1限～第2限
4. 対象学年及び実施教科・科目
第2学年 (普・商・看) 国語, 数学, 英語
第3学年 (普・商・看) 国語, 英語
5. 出題範囲 各学年, 各教科, 科目共に前学年での既習の学習内容の総復習を主眼とする。
6. 問題の作成及び処理
 - ア. 問題の作成及び採点(100点法による), 成績伝票の記入は当該教科に於て行う。(名票に記入して5/8までに学級主任へ渡す。)
 - イ. クラス毎の成績一覧表(得点, 合計, 総合計, 平均点, クラス内順位)は5/13までに各学級主任が作成し, 一部をコピーして教務へ集約する。
 - ウ. 問題紙の作成期限は4月22日(土)とし, その保管は当該教科で責任をもって行う。
 - エ. 教務による継続処理は5/15～5/17とし, 発表は5/18とする。
7. 結果の処理など
 - ア. 同一学習群別の各教科, 科目及び総合計による順位をつけ, 上位者10%程度を氏名発表する。(教務がこれを行い, 資料として学年及び進路指導部へ)
 - イ. 成績個人別カードに結果を記入し, 家庭へ連絡する。(カードは良質紙で3年間使用可)

能なものを教務で作成し、学級主任が記入する)

ウ、生徒の進路指導の参考資料として利用する。(学級主任、進路指導部)

8. 実施上の留意点

ア、各科目共に実施時間は50分間とする。

イ、問題の作成は同一学習群毎に、当該教科において行う。

ウ、受験場所は各自教室とする。

エ、当日欠席者は対象としない。

オ、生徒へは事前に実施計画を知らせておく。(学級主任…今回は4/18)

カ、監督は原則として当該時限の授業担当者が当り、次の表によって行う。

9. 実力テスト実施時間割及び監督表 (省 略)

第1回実力テストは上記の実施計画にもとづいて全職員の協力を得て行われた。更に第2回の実力テストは9月25日(月)第6校時を利用して、理科・社会の科目について行われた。

実施の要領は第1回のそれとほぼ同様であるが、科目の選択調査とそれに伴う集計処理作業等に若干の困難が感じられた。

第3回実力テストは、対象学年が1年生であり、既習の内容の総復習として、10月9日(月)第1校時～第3校時までに行われた。

V 実力テストの分析(その1)

学習指導委員会では、第1回の実力テストの実施後、各教科の答案の採点等を通して、当校の生徒の学力の弱点を明らかにして、その克服のための指導への足がかりとすべく、実力テストの分析を行なったが、次の通りである。

1. 国語について

a. 目立った弱点

記述式問題、理論的発想、基礎常識、解答技術、設問の意味、問題文の全体把握、漢文全般等に弱点が感じられ、文章表現など、小学校、中学校で終るべきもの、読解力の不足が目立った。

b. 診断としては

ふだんの学習が安易で、予習が不足している。

2. 英語について

a. 目立った弱点

単語の量、熟語、文法、問題文(長文)の全体把握、応用問題等に弱点が目立った。

b. 診断としては

一応の範囲を示しておいたにも拘らずできていない点から、学習習慣が身につけていない、又日本語の表現力が不足しており、英文解釈に役立て得ない。

3. 数学について

a. 目立った弱点

基礎事項、公式の利用等に難点があり、既習の事柄がどこかで失われている。又、考える力がない。

b. 診断としては

1年時に学習した基礎事項を忘れている。この事は受身的学習態度であることの証拠でもあり、苦勞していない、又疑問を持たない学習習慣の結果である。

以上の分析の結果が総括されて次のようにまとめられる。

- 1) 基礎的な知識にかける。
- 2) 応用力がない。(基礎的知識があったとしても)
- 3) 表現力、文章力が不足している。
- 4) 読解力(理解力)に欠ける。

VI 実力テストの分析(その2)

今年度第2回及び第3回での各教科のテストを実施した結果、総合的に分析したデータは次の表に示した。各学科における各教科・科目毎に到達目標と達成の度合等を数量化したものである。

1. 第1学年(英数国)の実力テスト 第2, 3学年(理社)の実力テストの所見 (1)問題の難易度, あるいは特徴, 2-1到達度目標, 3一定番度

国語	普通科	商業科	看護科	答案からみた学力上の弱点	今後の学習上 生徒に望むこと	その他の意見
1. 易しい問題 2. 60 3. 全体的に低い。	1. " 2. 60 3. "	1. " 2. 60 3. "	1. " 2. 60 3. "	基礎的は力に欠ける。 (表現力・読解力に欠ける)	基礎力の養成	各教科の先生方から読書のすすめを折にふれていただきたい。
1. 易しい基本問題が主 2. 60 3. 悪い。	1. 基本的な計算力と基本的な用語, 記号の理解 2. 50 3. まあまあである。	1. 基本的な計算力と基本的な用語, 記号の理解 2. 50 3. "	1. " 2. 50 3. "	(算) 単純な計算ミスが目立つ。	家庭学習時間の不足, 往復力, 集中力の不足を感じるのを以上をなくするように努力すること。	テスト時期をもっと早めて年間2, 3回実施する。 実力テストを行う上での事前指導が不足している。
1. 適当 2. 50	1. " 2. 50	1. " 2. 50	1. " 2. 50	文法力, 特に書く力が弱い。	自ら積極的に学習にとりくむ姿勢がほしい。	今後の課題として校外模試の性格にするのか, 宿題テストの性格にするのか, 性格づけを必要とするだろうか。
1. やや難かしい。 2. 55 3. やや不満足	1. " 2. 55 3. "	1. " 2. 55 3. "	受験者なし	基本事項の理解不足 問題を尻山解くことをやっていない。	教科書をよく読んで, 授業で何を学ぶのか, あるいはわからない点をあらかじめ把握して授業を受けることが肝要である。	
1. 基礎的なもの8割 応用的なもの2割 2. 45	受験者なし	受験者なし	"	計算力の弱さ, 基礎的事項が確実に暗記できていない。また基礎的事項が十分に活用されていない。	習ったことについて十分復習をすること 確実な記憶が必要, 基礎的事項が十分使えていない。	
1. 中程度 (内容, 形式は新大, 女子短, 衛技短を模す) 2. 55 3. 70%~20% (50%~30%)	なし	なし	1. 全分野から基本的問題 備前の教材に関連した内容も含めた。 2. 55 3. あまりよくない	(算) 理論的理解力の不足, とくに基本的事項の理解力に欠ける, 総合問題に弱い。 算, セクショント別はまあまあである。 (理) 理論的な理解に乏しい。正確に理解していない。	(算) 学習指導に対する生徒の根拠, 意図が問題である。 (理) 学習が継続されたい点, 最大の問題 根拠よく努力すること。	生徒の学力や定着度を知るうえで大変参考になった。 さらに改善を加えて買えるものにしていただきたい。
1. 基本的な内容で易しい 2. 70 (70) 3. まあまあである	1. " 2. 60 (70) 3. 少しわるい	1. " 2. 60 (70) 3. 少しわるい (よい)	1. " 2. 60 (70) 3. 少しわるい	与えられた語群からの解答はよくできるが, そうでない問題(漢語を記入)については解答が低い。基本的なことについても確実に覚えていない。	定期テストの時だけの学習という感が強い。基本的なことはうろ覚えでなく確実に記憶すること。	
1. 大平入試の中から基本的な問題を抽出 2. 60 3. 予想よりややよい	1. 1学期の範囲ということで勉強すれば比較的容易 2. 55 3. よくない	1. 1学期の範囲という 2. 55 3. よくない	1. " 2. 55 3. 普通	(算) 記述問題に弱い (表現がまずい) 記号式の問題はよくできた。 (商) 説明問題, 考えて空欄をうめる問題が得意。教科書, ノートに目をおおすだけで理解が弱い。	内容の深い, かつ正確な (特に用語について) 理解を望む。	実力テストそのものを監視しているのではないだろうか。 1学期分の復習をしたものとしなければいけないもの。
1. 大平入試の中から基礎的なものを抽出したが, やや難かしい。 2. 50 3. 30%	1. " 2. 50 3. 30%	1. " 2. 50 3. 30%	1. 基礎的問題 やや難かしい 2. 55 3. 45%	(語) 形容詞, 当て字が多い。基礎的なものが知られていない。 (算) 基礎学力の不足	人名, 歴史中事項など基礎的なものを理解し, 流れをよよく把握するように努力すること。	
1. 大平入試より標準的なものを教科書の内容に準じ精選。やや難かしい 2. 70 3. 普通	なし	なし	なし	単語, 人名などは標準に書いておぼえるようにする。歴史の流れを立体的に把握するようにする。	受験するからには自己学習の背景が欲しい。	
1. 基礎的事項中心 2. 70	1. " 2. 70	1. " 2. 70	なし	受験するからには自己学習の背景が欲しい。		
1. 基礎的事項の7割 2. 40	なし	なし	なし	問題文の読みかたを失敬する。よく読めないうまく答えが得られていない。記述問題が肝要。誤字が多い。地図, 資料の読解		全教科で話し合い, 誤字を正解しようとする必要がある。生徒に認識させる必要がある。

<実力テストの分析表>

1年 英・国・数

2・3年 理・社

科目	科	受験者数	到達目標(点)	到達目標達成者数	達成の割合%
国語	普	270	60	223	86.3
	商	88	60	80	90.9
	看	40	60	39	97.5
数学Ⅰ	普	270	60	53	19.6
	商	88	50	27	30.7
	看	40	50	13	32.5
英語	普	270	50	106	39.3
	商	88	50	50	56.8
	看	40	50	22	55.0
物理Ⅰ (2・3年)	普	73	55	7	9.6
	商	6	55	0	0
化学Ⅰ	3普	14	45	2	14.3
生物Ⅰ	2普	20	55	1	10.0
	3普	10	55	15	75.0
	2看	27	55	2	15.4
	3看	13	55	12	44.4
倫社	2普	56	70	31	55.4
	3普	15	70	13	86.7
	2商	73	70	44	60.3
	3商	18	60	3	16.7
	2看	19	70	6	31.6
	3看	9	60	0	0
政経	普	79	60	75	94.9
	商	44	55	1	2.3
	看	2	55	1	50.0
世界史	2普	110	50	18	16.7
	3普	26	50	8	30.8
	3商	18	50	3	16.7
	2看	11	55	3	27.3
日本史	普	45	70	15	33.3

< 考 察 >

国語では易しい問題を出題しているので到達目標を比較的高くしてあり、達成率は良い。しかし、数学は極めて低いのが特徴である。英語の場合は受験者数の多い普通科の達成率が低いのが目立っている。物理Ⅰはやや難かしい問題のため、選択者のうち達成率が10%にも満たない。化学Ⅰは基礎的なもの8割と応用的なもの2割の出題にも拘らず目標達成率は極めて低い。生物Ⅰは中程度の問題であり、3年生普通科の達成率が良い。倫社は基本的な易しい問題であり、3年生普通科は良いが商業科は低く、学科による学力差がみられ、生徒の多様性がわかる。政経は大学入試問題より抽出して出題したが予想よりやや良い点が目立っている。世界史と日本史は大学入試問題より基本的なもの、標準的なものを教科書の内容に準じて精選し、出題したが、達成率はそれぞれ思わしくない。

VII 実力テストの反省と総括

学習指導委員会としては今年度実施した実力テストの分析を通して、次のいくつかの点を反省し、次年度への改善点を明確にした。

1. ねらいを更に徹底し、効果あるものにする。
2. 1年生についても中学校の総復習ということで、4月に英・国・数を実施したらどうか。
又、4月下旬に2年生は英・国・数。3年生は英・国を実施。
そして9月下旬に2・3年生とも理・社を実施する。
3. 各教科共、事前に出題範囲を具体的にプリントなどで生徒に示し、学習の目安をつけさせる。
4. 実施から発表までの期間をなるべく短縮し、ホットなうちに発表出来るようにする。
また実施後に自己採点をさせてみるなどしてふんい気を盛り上げる。
5. (1) 上位者発表の人数を増やす。
(2) 結果の記録や父兄への通知は「通知表」の改訂とからめて考えてみる。
6. 理・社の試験科目について
(1) 理科はⅠのみとする。

校務分掌組織の上で直接の係として、教務部学習係が実際の計画から実施までを主管した訳で、この意味からも全職員に対するアンケート調査を行ない反省点等を明確にしたいとの観点から、主に実施計画の各項目について意見を集約してみた。出された意見とその要約、改善点を次に示そう。

1. ねらいについて

- 模擬試験の性格が含まれることを考えて標題でよい。更に教師サイドからみた理解及び定着度の測定も標題に入れたい。(理)
- 多少の効果はあったと思うが、事前指導(例 出題範囲を明確に示すなど)を行うことによってもっと効果を上げ得るのではないか。(社)
- アンケートによると事前学習はほとんど行われていない。が、事後に復習を始めた生徒が居り、「やらないよりはやった方がよい」程度の意義がある。(数)
- 日常の指導の結果をみる観点から内容面での検討が必要。又、趣旨の徹底に工夫が要る。更に各教科を総括した一定の方針で一致してやるべきである。(英)
- 役立っている。大いに役立つよう教師側の工夫が必要である。(1年)
- 一時的な意欲であり役立っていないようだ。(3年)

<要約>

ねらい達成には更に一段の工夫が必要である。

<改善案>

教師側の一層の理解と、生徒に対する事前指導の徹底が不可欠な要素であると思われるので、これを裏づける具体的方策を実施の要領に盛り込んだらどうか。

2. 実施期日及び時限等について

- 実力テストの立場から、3年生の数学を入れたら良いように思う。又、理科では出題範囲からみて9月下旬が良い。(理)
- 時期は適当(やむを得ない)だろう。但し、放課後の実施は受験者が少なくなることもあり、検討の余地があろう。(社)
- 大体において適当。1年の数学は年2回の実施にしたらどうか。(数)
- 年1回は少ない。但し、各種の模試等も考慮した上で検討すべきことと思う。(英)
- 1年生はやや時期が遅いように思われる。6月頃が適当ではないか。(1年)
- 1年生刺激の意味からも、2・3年生といっしょに4・5月の段階で実施したらどうか。
(国)
- 年に2・3回、1～3年まで同時に行いたい。(3年の校内模試の延長として考えて)
(3年)

<要約>

教科によっては回数をふやしたり、時期を早めたりする必要がある。

<改善案>

各種模試との関連も考えて、英・数は回数を増したい。又、理・社は9月の下旬が良い。1年は2・3年と同時にやったらどうか。又、放課後は実施しない。

3. 出題範囲について

- 事前に範囲を明確にして学習させるようにする。(社)
- 出題範囲を更に具体的に指示したい。単元毎やページ等を指定して、事前学習をしやすくしてやる。(数)
- 出題範囲をキメ細かくして学習の目安をつけさせる。又、前学年で履習した事項を重点的に出題したらどうか。(英)

<要約>

事前学習をしやすくするようにより具体的に 出題範囲を示す必要がある。

<改善案>

各教科共に事前に 出題範囲を具体的にプリントなどで生徒に示し、学習の目安をつけさせる。

4. 実施上の手順と日程等について

- 実施から発表までの期間が長すぎる感あり。従って10～15日以内に発表するべきだ。(理)
- 従来通りでよい。(社)
- 特になし。(英・国)
- 校外模試などを利用してもう少し手間を省けないものか。(3年)

<要約>

採点期間との問題もあるが、もっと手間を省き、スピーディに出来ないか。

<改善案>

作業分担を更に合理化して能率化すべく日程を組む。

5. 結果の処理等について

- 英・数・国は教科毎の得点と総合計による順位をつける。理・社は科目毎の得点による順位で20%程度の氏名公表。(社)
- 従来の通知表に中間考査と実力テストの成績を記載するように出来ないか検討して欲しい。(英社)
- 3年間使用可能な通知表はどうか。又、中間も実力も入れるとすれば評価規定も変ることになる。(英)
- 通知表といっしょにする工夫を。(1年)(国)
- 進学指導個人カードには従来は記入らんはないが、形式をかえて記載できるように検討してみるのも良い。(社)
- 学級主任の事務が大変。必要ないのでは。(数)
- 記入の方向が良い。又、発表人数を増やしたらどうか。(80点以上なら10%にこだわらず

に発表したら良い)。(国)

- 通知表の中に記入出来るよう一本化したらどうか。(国) (3年)

<要約>

通知表に記入出来るよう検討の余地がある。又、中間考査も併せて考慮すべきであり、通知表の改訂の時期に来ているようだ。

<改善案>

中間・期末・実力テストを記入出来る通知表の改訂をしたらどうか。又、発表の人数も10%にこだわらずに、増やすのも一工夫だろう。

6. その他

- 理科はⅠだけにしてⅡはやらない。(理)
- 科目選択の手続はもっと工夫して合理的にやったらどうか。(社)
- 2年の理・社は4月に実施したらどうか。時期・内容から検討してみる必要があろう。
(英)

- 時間は60分程度が望ましい。(国)

- 50分でよい。(3年) (社)

<要約>

50分で大体良い。又、理科はⅠのみで良い。

<改善案>

ア. 校時表との関係もあり、50分で良い。

イ. 理科は各科目共にⅠのみにしたらどうか。

ウ. 科目選択の手続は更に合理化し得る。

学習指導委員会としては各種のデータ分析をもとに今年度実施された実力テストに関する総括を行ない、次年度への改善すべきいくつかの提言を行なった。更に実施計画に関しては教務部学習係がアンケート調査の結果をもとに総括を行なったのである。

学校としては今年度の実践をふまえて更に次年度実施のための大綱の決定という段階に至って、改定点を含めて、次のように決定した。

参考までに昭和53年度と昭和54年度の計画の主要な事項を対比させながら、改定点を明らかにしてみよう。

年度 時期 学年	昭和54年度 実力テスト（案）		昭和53年度 実力テスト（参考資料として）		
	4月下旬実施	9月下旬実施	4月下旬	9月下旬	10月上旬
1年	英・国・数	英・国・数	米	米	英・国・数
2年	英・国・数	英・国・数	英・国・数	理・社	米
3年	英・国	理・社	英・国	理・社	米

- 〈改定点〉
- 1・2年の英・国・数は年1回の実施を2回に増やした。1年の4月実施については入学後の学習意欲の旺盛な時期に実施することによって、学習意欲高揚への刺激剤となるよう狙った訳で、学習習慣の定着と1年時での意欲を持続させ向上させるのが目的。
 - 2年の理・社の実施については、これを廃止することとした。これはカリキュラムにおける履習の時期の問題と生徒の進路とのかね合いを考慮した結果である。従って理・社は3年の9月下旬のみとなる。
 - その他理・社の試験科目はIのみとし、社会は全科目とした。
 - 実施後から発表までの期間の短縮について、事後処理を能率化して、生徒の雰囲気をもり上げる意味からもホットなうちに上位者の発表を行なう。
 - 発表する人数を増やして意欲をもたせる。上位者の10%から20%に変更する。
 - 各教科共、事前に出題範囲を具体的にプリントなどで生徒に示し、学習の目安をつけさせる。

※ 実施の要領は前年度のものを原則として踏襲することとする。

VIII 新しい局面打開への動き

昭和53年より実施された当校の実力テストは上記の如く、いくつかの改定点を伴って昭和54年度でも実施されたのであるが、学習指導委員会では昭和54年度の検討課題として、「実力テストについて」を年度当初から掲げて、討議を重ねてきた。その結果、年度末の総括に際して各教科へ次のような提言を行ったのである。

〈提言〉

「実力テストが実力の向上に資するという所期の目的に合うものとなるためにはどうすればよいか」

この提言を受けて、各教科部会で話し合いを行ない、反省点を含めて率直な意見を出してもらったのが次に示すものである。

1. 実力テストに関する各教科からの意見。

- 実施のねらいがあいまいで教師サイドの意識のアンバランスがみられる。
- 既習の範囲で出題する必要はない。
- 焦点がはっきりしない。生徒にとっての最大関心事であるようにしたい。
- 模試の要素をとり入れて、実施は従来通りでよい。
- 進路を意識した効果をねらうことが必要で、テストのねらいを再検討する時期である。
- 実力をつけるのに役立つので、模試とはねらいがちがうし、両立させたらどうか。
- 生徒はテスト攻めでマンネリ化しているので、もっと意識高揚を図ったらどうか。
- 事務処理はよいが、ねらいがあいまいである。又、範囲を示したらどうか。
- 高看試験向けに模擬テストとして進路指導部で実施している模試との調整を図って年2回位はやりたい。
- テストの回数が増える一方なので、精選出来ないものか。

2. 改善を意識した意見

- ふだんのテストとのちがいが生徒には判らないのでねらいを明確にして、特色を出したらどうか。
- 全校生徒が受験することに特色があり、意義もあるのだから、模試を同化させることは出来ないか。
- 実力の判定については外部テスト（業者テスト）と差があるので、問題作成に当ってレベルアップしたらどうか。（偏差値によるデータ処理などの工夫も考えられる）
- 事後指導に十分活用されていないのではないか。もっと生徒に利用されるようにしたら。
- 学年の意向を吸収したものとして、進路指導に役立つものになりたい。

このように各教科からの意見や改善の意見をふまえて、学習指導委員会では次年度の実力テストは如何なる性格のものとするべきか、又、既に数年前から各学年で実施している学年外部テスト（課外に実施）や進路指導部による模試との関係を如何に調整し得るのかなどについても年度末を控えて早急に結論を迫られることとなり、学校としてのトータルシステムの中における実力テストの在り方をさぐるべく、次の資料を作成し、更に審議を重ねた。

〔実力テスト統合のための視座〕（資料）

1. 学習指導委員会の結論

- 実力テストは進路的性格をもたせて、学年別、学科別の配慮を加えながら、外部模試との統合の方向で考えていく。

2. 従来テスト類の性格を明確にする。

- a) 実力テスト……………既習の内容の総復習

- 授業時間内で実施
 - 対象は全校生徒
 - 実施教科は、英・国・数・理・社
 - 監督は授業時間担当者
 - 学力評価は校内規模で、同一学習群毎で学年別。受験料は無料。
- b) 学年外部模試……………既習の内容
- 課外及び休日に実施。
 - 対象は学年単位で全員、もしくは希望者（商・看）
 - 学力評価は全国レベル、県内、地域レベル。
 - 受験料は徴収する。
- c) 進路指導部対外模試
- 課外もしくは休日に実施
 - 対象は学年単位で希望する生徒
 - 監督は進路指導部職員
 - 受験料を徴収する。
3. 統合後の実力テストに予想される基本的事項とその内容
- 1) 時期及び実施の回数
 - 春・秋各1回 ◦ 年間1回
 - 2) 実施教科
 - 3教科 ◦ 5教科 ◦ 専門教科（科目）を加える。
 - 3) 対象
 - 全学年 ◦ 1・2年のみ ◦ 普通科・商業科・看護科
 - 4) 内容
 - 外部模試 ◦ 就職模試 ◦ 準（高）看模試 ◦ 自校作成
 - 5) 受験料の徴収
 - 徴収する、しない、部分徴収 ◦ その金額
 - 6) 主管する分掌
 - 教務部 ◦ 進路指導部 ◦ その他
 - 7) 成績処理
 - 校内発表 ◦ 家庭通知 ◦ 進路カード記入 ◦ 定期（期末・中間）考査との関係 ◦ 通知表の改訂の可否
 - 8) 実施のねらい

- 進路的性格の強化
- 既習事項の総復習

上記の資料をもとに実力テスト統合に関する委員会の報告として次に示す通りの内容を職員会議にはかったのである。

1. 実施時期及び回数……年間2回（春・秋）とする。
2. 対象学年……1年 普・商・看全員 2年 普・商・看全員
3. 実施教科……3教科（国・数・英）とする。
4. 問題作成……外部テスト（業者テスト）の利用を原則とする。
5. 受験料……受験者より徴収する。
6. 主管……進路指導部が行なう。

しかしながら、1から5までの項目については大方の賛成が得られたものの、6の主管については論議が起り、結局は、教頭、教務、学年、進路指導部からなる小委員会で主管することとなった。

IX 新たな実力テストの実施と今後の課題

当校が、「学習意欲の高揚と学力の向上への一助とする」とのねらいをかかげて、昭和53年度から実施してきた実力テストは、改善されながら翌昭和54年度にも実施され、2ヶ年間の実践が行われた。この実践を通していくつかの問題が浮き彫りになったが、それは次のようなものである。

1. 生徒サイドからの問題点：

ア、実力テストのための事前の学習がほとんどなされていない。例えば昭和54年10月12日に行った1学年普通科、商業科、衛生看護科の生徒192名を対象としたアンケート調査によれば、「実力テストに備えて勉強したか」の問に対して、「ちょっとした（30分未満）」と「全くしなかった」を合わせると81.7%にも達している。又、数学だけについての調査では「いつ頃からその準備のための学習をしたか」の問に対して、「1週間前から」4.7%、「2・3日前から」17.2%、「前日だけ」17.2%であり、意欲の高揚をねらっているものの、極めて不満足な状況であったことがうかがえる。

イ、実力テストに対しても常に受身の立場で終始し、自ら積極的に立ち向かう気力に富む生徒の数は少ない。

2. 教師サイドからの問題点：

ア、実力テストに対する教師の意識のアンバランス。学級主任の中には実力テストなのだから、事前の準備なしで受験し、その結果自分の実力を自覚した上で学習に励むのが本来であるとの考えを持っているものもあり、生徒への事前指導が不十分であった場合もみられ

る。

イ. 各教科での問題作成上の不統一。教科によっては到達目標を70点とするところもあれば、50点とするところもあり、難易度に統一を欠いた事があげられる。又、教科の特性から従来行われてきた宿題テストと同一視して問題の作成をしたところもある。

ウ. 実施教科以外の教師の意識の低さ。問題作成や採点とは無関係な教師の場合は必然的に無関心にならざるを得ないだろう。

エ. 事後指導の不徹底。学級主任としては、実施後のデータをもとに、個々の生徒に対してはキメの細かい指導が期待されてはいるものの、日常の多忙さに妨げられて十分な指導が出来なかった。

3. 実施計画からみた問題点:

ア. 計画自体に多面的配慮が足りなかった。年間を通して生徒が受験する諸々のテストとの関連を適切に配慮することに欠けていたため、学年外部テストや進路模試との競合が感じられ、又、事前指導に対する配慮が足りなかった。更に、実施から発表までの処理に合理性が足りなかった。

イ. 実施後の処理作業の分担に適切な配慮を欠いた。作業の分担が偏り、全職員の作業への参加が十分でなく、従って教師の意識上のアンバランスを生んだと考えられる。

以上の問題点に加えて、2ヶ年間の実践の経過の中で、職員間に学力向上に対する強い要請が顕著になって来たことも見逃がせない。即ち、当校が男女共学になって以来、普通科では年々男子生徒の数が増え続けており、上級学校への志向の様相も変わってきている。又、商業科や衛生看護科に於ても例えば就職試験で他校の普通科卒業生と競争しなければならないとか、地元の高等看護学校の3年制化が実現したことからくる情勢の変化など、兎に角学力の向上が進路との関係で、さし迫った課題となりつつある現状に照らして、従来の実力テストを変えなければならなかったのである。

さて、このような背景のもとに昭和55年度の実力テストは既述の大綱にもとづいて、小委員会で具体的な実施計画を作り春・秋各1回ずつ実施された。これは1・2学年を対象としていずれも外部テストを利用し、3教科(英・国・数)を授業時間の中で行ったのである。

学習指導委員会ではこの新たな実力テストに関して反省と総括を行なうこととして目下準備中ではあるが、現在の時点で考えられる今後の課題としては、次のものがあげられる。

1. ねらいを明確にして、キチンとした実施計画を作成し、学校の主体性を確立しながら実施するという方向性が必要であろう。
2. 事前指導のあり方についての研究が未だ不十分であり、今後は更に積極的な指導が考えられねばならない。

3. 科学的で豊富なデータを如何に利用していくのか、学校体制の中で有意義な活用が望まれる。
4. 学習意欲の高揚や学力の向上は教科担任教師だけでなく、学級主任による指導も重要な意味をもってくると思われるが、今後は特に学級主任の指導のあり方にメスを入れねばならない。
5. 実力テストと進路指導との関係が重要視されるように期待されているのであるが、入学から卒業までの間にどのような関わりを持つべきであるのか、又、学校のトータルシステムの中に如何にかかわり得るのかが更に追求されねばならない。

X お わ り に

総合制高等学校としての当校が、昭和49年より男女共学校となり、生徒の多様性も増す中でいくつかの課題を意識しはじめ、特に学習意欲の高揚と学力の向上を主要な課題としてとり上げてから、既に5年の歳月が過ぎようとしている。

学習指導委員会が昭和51年度末にプロジェクトチームを組んでから、1年後には具体的方策としての実力テストの大綱が決められ、それを受けて昭和53年度、54年度と2ヶ年間の実施を経て、昭和55年度には新たな実力テストの誕生を見たのであるが、この新しい内容を持った実力テストについての検討にとりかかろうとしている。

現職における研修の必要性が強く叫ばれなければならない今日、日常の教師活動の中で常に課題意識を持ちながら教育実践を続けることは、公教育にたずさわる教師に与えられた責務を果たす一つの方法でもある。この意味で、当校の学習指導委員会の活動の記録を辿ってみて、このような形で研修を続けてきた委員の方々の苦労をはじめ、共通理解にもとづく全職員の協力と努力に対して敬意を表し、あわせて深く感謝するとともに、1980年代の高校教育はどうあるべきか、又、如何にしてそれが可能となり得るのかを絶えず意識しながら実践を続けていきたいと思う。